

続 ビール紀行

吉井厚志*

青島（チンタオ）ビール その1

雪のソウルで体は冷えきってしまい、暖かいところで、おもいっきりビールを飲みたくなった。次の訪問先は香港である。ちょうど良い天候のもとで、大好物の青島^{チンタオ}ビールを飲めると思うと気持ちがはずんでくる。

この旅はビールを軸としたグルメツアーなどではなくて、れっきとしたESCAP（国連アジア太平洋経済社会委員会）のミッション（1991年2～3月）である。台風委員会メンバー8カ国で2日ずつ洪水対策のためのセミナーを開くため、講師として3人が派遣されている。私もその一人で、相棒のトルコ人とオーストラリア人に世話をかけている。香港からトルコ人の替わりにバンコクのESCAPに勤める日本人が参加する予定である。雪の国と常夏の地、上り調子のNIESから涙ぐましい状態のインドシナへと飛び歩く体力勝負の旅なのだ。ビールだけが友達だ。

横文字だらけの行程が半分終わったが、香港からオーストラリア人の奥さんが合流して、英語に辟易してきた。そのためか、目は過剰包装気味の日本人女性旅行客を追いか求め、普段ならば叩き殺したくなる「だからあ…」さえも耳が期待している。ただし、舌だけはフルーティな香りの青島ビールを渴望していた。

久しぶりの日本料理で昼食にしようと、香港島のそごうデパート地下でお好み焼き屋に入った。ちょうど週末だったので、理由をつけてオーストラリア人夫婦と別れて、日本を懐かしむつもりでいた。するとタイミング良く、隣の席に女性2人連れの日本人観光客が座ったのである。久しぶりのお好み焼きに久しぶりの日本語会話と心が躍った。頭の中で横文字を排除し

て純粋日本語を組立て、さり気なく声をかけ、しばしの会話を楽しんだ。何気ない会話であったが、天にも上る気持ちであった。決してホテルの名前とルームナンバーを聞き出そうとしたわけではない。

ただ残念だったことには、そのお好み焼き屋に青島ビールは無く、サッポロを飲まされてしまった。

青島（チンタオ）ビール その2

お好み焼き屋と喫茶店だけで彼女たちと別れ、ちょっと惜しい気持ちをぐまかしながら、^{カオルン}九龍のホテルに戻った。同行のオーストラリア人夫婦はまだ戻っておらず、合流するはずのバンコク在住の日本人もまだ着いていない。

それでは、夕食に刺身で青島ビールだ！ と心に決め、九龍の繁華街で日本レストランを探した。あるホテルのショッピング街で日本人シェフのいそうな高級鮨屋を見つけ、喜び勇んでカウンターの席に着き、刺身と青島ビールをオーダーした。しかし、きちんと和服を着込んだ香港チャイニーズのウェイトレスは、営業上の微笑みを浮かべ、青島は無いと答えた。ついてないことに、また青島ビールにはありつけず、香港サンミゲルで我慢することになった。私の落胆の表情に気がついたのか、日本人シェフはカウンター越しに、旬の魚をいろいろと勧めてくれた。

しばらくすると、美しく着飾った日本人女性（40歳前後）がしとやかな素振りでカウンターの端の方に腰を下ろした。さて昼間の要領でと、さり気ない日本語の言葉の組立てにかかったが、声をかける前に彼女の連れが現われてしまった。どこぞの重役ふうの気取った男は、慣れた仕草で彼女の肩に手を置きながら、その横に座った。そして、金のローレックスが光る左

*環境研究室長

手を軽く上げ、日本人シェフに「やあ、しばらく」と言った。

迷惑を顧みず話しかけた私であるが、2人は簡単なあいづちを返すだけで、すぐに2人の会話を没頭してしまう。しかたなく一人寂しくサンミゲルを飲んでると、シェフを交えた楽しそうな2人の声が聞こえてくる。話の断片を繋げてみると、彼等は別々のフライトで香港に着いたばかりで、久し振りの逢瀬らしい。馴れた手つきのビール瓶のやりとりを見ていると、自分自身が余りにも哀れになってきた。これから中国、そしてタイ経由でラオス、ベトナムと英語のセミナーが続き、家族の待っているマニラに帰るのは2週間後である。そんな不遇な男に優しい日本語の言葉ぐらいかけてくれたって良いじゃないか。

会話に入れ込めなかったひがみと、青島にありつかなかった苛立ちから、せめてもの腹癒せに、彼らの仲は尋常ではないと断定した。想像が膨らむに連れて、なおさら自分が惨めになり、目をそむけるようにレストランを後にした。

ホテルに戻る途中で半ダースの青島ビールを買い込み、それで機嫌を直すことにした。青島ビールのフルーティな香りが惨めな夜をかろうじて取り繕い、私は日本語で独りごちながら、家族への手紙をなぐり書き、情けない涙をこらえていた。

五星ビール

香港から北京への中国民航機は、2年前に乗ったときより少しは近代化されていた。キャビン・アテンダント（この2年の間に、スケジュールという言葉は死語になった）は昔の日本のバスガイドに似た制服から脱皮し、給食のおばさんを彷彿とさせるエプロンもやめたらしい。しかし、彼女たちの態度は相変わらずで、職業上の微笑みさえ浮かべず、機械的におしぼりを配っていく。

けれども国際線はまだましらしい。国内線の彼女たちは、熱いウーロン茶のサービスをするために、でっかい金色のヤカンを振り回すんだ、と在北京日本大使館の書記官が教えてくれ

た。そして紙コップからこぼれた熱いお茶で火傷した乗客のため、漢方薬が常備され、飛行場には救急車が待機しているという。だから熱いヤカンで顔を殴られるのが嫌だったら通路側に座らない方が良く、と彼はアドバイスしてくれた。

話は戻って、国際線のキャビン・アテンダントは、アルミホイルで蓋をした朝食を配り始めた。この辺は2年前とあまり変わっていない。それから紙コップを配るので、まさかヤカンが出るまいと見守っていると、さすがにワゴンを引張ってきた。中国風英語で何を飲みたいのかと聞くので、当たり前のように「ビール」と答えると、彼女は目を丸くして驚いた。青島（チンタオ）じゃなくても五星ビールでも良いのだよと私は付け加える。しかし彼女は、資本主義社会にスポイルされた飲んべえ日本人め、朝から酒を口にするなど勤労を尊ぶこの国では犯罪なり、というような非難のまなざしで、ビールは無いと答えた。私は国際線の機中でビールを飲むことは国際条約で認められた確固たる権利だと信じている。飛行機や電車の中で寛いで飲むビールの旨さについて、世界中の哲学者ないし文学者が論じているではないか。きっと同行の酒のみオーストラリア人夫婦だって、そう言うに決まっている。しかし、ジュースかお茶、コークもあるよという答えしか返ってこなかった。

ビール抜きの味気無いフライトを終え、時間のかかる税関検査を経て、1時間以上車に揺られ、やっとホテルに辿り着くと夕方になっていた。転んでもタダで起きない私は、香港からずっと乾きに耐える試練を自分自身に課していたため、いっそうおいしい五星ビールにありついた。

ラオ・ビール

中国から次の目的地のラオス、ビエンチャンに着くまでは大変な騒ぎであった。北京から香港経由でバンコクに入ったはいいが、バンコクのラオス大使館とベトナム大使館で両国の入国ビザを取らなければその後のミッションが続けられない。1週間前香港においても、中国の入

国ビザを2日間で取るために駆け回っていた。在香港日本領事館から在北京日本大使館への電話で中国政府水資源省に働きかけるよう頼み、水資源省から在香港中国ビザセクションにファックスを入れてもらうという禁断の離れ業をしたばかりなのだ。あらかじめ各国政府に対して国連を通じて文書を送っているものの、受入れについての回答が間に合わず、このような無理が重なっていた。

バンコク滞在を延ばして、1日2カ国のビザを取るという無謀な試みをするようになった。まずベトナム大使館を訪れ長い列に並び、申請書を提出し、数日かかるという担当官に事情を説明し、国連のレターの強みで当日3時交付の約束を取付けた。それから渋滞のバンコク市街地をタクシーで走り、ラオス大使館へと向かった。粘ったものの、ラオス入国ビザの当日交付は断られ、翌朝一番に受取ることになった。再びベトナム大使館に引き返し、約束の3時にビザの添付されたパスポートを受取り、それをまたラオス大使館に届ける。ひとつでも引っかかると翌日からのラオス・ベトナムのセミナーに穴を開けるという綱渡りである。

その晩は、翌日のラオスのビザが間に合わない、あるいはビザ取得後バンコク国際空港発ビエンチャン行きに乗り遅れた場合、どの様にベトナムのハノイに行き着くかについて、クロスタービールを飲みながら考え続けた。タイのクロスターはシンハービールよりも日本のビールに似ている、やはり美味しいご当地ビールである。

翌朝、ラオス大使館の開館が遅れたものの、問題なくビザを受取り、渋滞のバンコクを際どいタイミングで切り抜け、飛行機に間に合うことができた。そして、ビエンチャンの国際空港ではっとする間もなく、ホテルにも寄らずにセミナーの会議室へと連行された。タイでビザ取得のため費やした1日のせいで、タイトなスケジュールになったのである。

暑い国で、これだけ走り回った後のビールは、禁煙後の煙草以上に美味しいのは一般常識である。バンコクからビエンチャンへの修羅場を経た上に、すぐさまフィリピン訛の日本人英

語とオーストラリア英語、アメリカ仕込みの日本人英語にラオ語がとびかうセミナーをこなしたのである。ラオ政府の招待で、メコン川を足元に望むレストランに辿り着き、やっと一息ついた。メコン川の川面を吹き抜けてくる風の中で飲み干すラオビールは、それまでの奮闘を十分ねぎらってくれた。以前「いつもぬるく、時々白濁している」と悪口を言っていたラオビールであるが、とにかく旨く、素直に前言撤回した。

ベトナムのハイネッケン

洪水対策のためのセミナー最後の開催地は、ベトナムのハノイである。ハノイは雨季に当たるのか、じめじめして、そこらじゅうカビの臭いがねっとりとはりついていて、ベトナム水資源省の担当官が用意してくれたホテル（五つ星らしいが木賃宿と言う風情）は、カビ臭が特に強く、風呂場のタオルはヌルヌルして、足の裏からカビの菌糸が入り込んでくるような気がする。臭いを紛らすため、そして鼻と口から入るカビの胞子をアルコール消毒するため、夜になるとハイネッケンを飲み続けた。布団の中まで臭いがしみつき、湿っぽいので、ビールの助けを借りなければ寝ていられない。朝起きると、目を開ける前に鼻が自分の位置を嗅ぎ当てる。

とても我慢ができず、初日のセミナーが終わってから別な宿を求めてハノイの賑わいの中を歩き回った。2年前に泊まったことのある政府のゲストハウスならば、もっと居心地が良いはずである。ハノイの路地の脇には屋根の低い家々が近接して連なり、濫んだ浅いどぶが道路と家の間をкаろうじて区切っている。人々は、その境界の辺りで御飯の用意をしたり、おしゃべりを楽しんでいた。前を通り抜ける不審な外人を訝しげに見送る親子もいた。

記憶を頼りにゲストハウスを探し当て、ミッションメンバー全員の宿泊が可能であることを確認した。あの湿り気と臭いから逃れられると思うと、本当に嬉しい。

しかしホテルに戻り、オーストラリア人に宿を移ろうと提案すると、あっさりと断られてしまった。彼が言うには、ベトナム政府として良

かれと思って準備してくれた宿だから、それをキャンセルするのは失礼に当たる。俺のスコッチを飲んでいれば、臭いはそのうち忘れるさ。確かに彼の言うとおりで、勝手に宿を移ることはベトナム政府の好意を裏切ることになる。自分の立場を忘れて図に乗っていたことを反省して、オランダから輸入したハイネッケンではなく、現地の『333ビール』の苦さを味わった。

ハノイ最後の晩、ベトナム政府水資源省の担当官たちが、そのホテルの食堂で盛大なパーティーを開いてくれた。オーストラリア人は赤らんだ顔で、笑いながら片目をつぶり、臭いよりもホスピタリティーさ、と言った。

再びサンミゲル

ハノイからホーチミンシティで飛行機を乗り継ぎ、バンコクで1泊してから、やっとマニラに辿り着いた。4週間で8カ国を回るというミッションは、そのへんのサスペンスやミステリーよりもワクワクさせられたが、ハードボイルド並みの疲れが全身を包んでいる。

久し振りに家族と食卓を囲みながら、やっぱりサンミゲルだ！ と叫んでしまった。その貞操観念の無さに自ら苦笑して、やっぱり『ご当地ビール』だよな、と言い直した。

*

*

*